

第十一走者『大切』

ロックバンド「ザ・イエローモンキー」の六枚目のアルバムの中に「淡い心だつて言つてたよ」という名バラードがある。

その中で、吉井和哉氏は「今この時間は僕たちのとても大切な瞬間だよ　でもどうして大切という字は大きく切ないのかな」と歌い上げている。「大切」という言葉を「大きく切ない」と解釈した彼の卓見に大いに驚かされた。なるほど「大切」に思うということには、どこか「切なさ」が伴う。また、「大いに」としないで「大きく」としたところも見事である。優れた詩的感性のなせるわざだ。本当に「うまい」と思った。さらにその「切なさ」を、デイミニッシュ系のコードを混入させることによつて、音楽としても見事に表現している。まさに吉井ワールド全開である。うらやましいくらいの才能だ。

と、同時に少し疑つてもみた。語源的にはどうなのだろう、「切ない」が「切無い」だったとしたら、吉井氏の解釈には無理がある。「切」と「切無い」では反対の意味になってしまう

からである。こういう時は日本国語大辞典にうかがいを立てると決まっている。

すると、「切ない」の「ない」は形容詞を作る接尾辞とあるではないか。

吉井氏はやはり正しかった。さすがである。彼が語源を調べたかどうかはわからないが（たぶん調べていないだろう）、とにかく私のつまらぬ屁理屈よりも、彼の言葉自身に対する感性の方を信用すべきだったということだ。恥をかいてしまった。私はエセ評論家にはなれるかもしれないが、とても詩人にはなれないと思つた。

そんな話を家内にしたら、そんなことあたりまえじゃん、と言われてしまった。いや、詩人になれないに決まってるじゃん、ということではなく、「ない」が接尾辞だということについてである。私が呆気にとられていると、秋田の山奥の出身である家内は、次のような方言をよどみなく私に浴びせかけた。

とせねあ（退屈だ：徒然＋ねあ）

やちやくちやねあ（雑然としている：やちやくちや＋ねあ）

こまんじねあ（汚い：小十まずし十ねあ）

やかましねあ（やかましい：やかまし十ねあ）

おそろしねあ（おそろしい：おそろし十ねあ）

むげねあ（むごい・ひどい：酷し or 無下十ねあ）

確認するまでもないが、「ねあ」は「ない」の変化形である。

しかし、それらは一見してわかるように、いわゆる「無い」や打消しの「ない」ではない。形容詞を作る接尾辞なのだ。そして、これらの言葉に共通しているのは、どれも強いマイナスイメージの表現であるということだ。つまり、それらの方言の語幹、つまりもともと存在した語（たとえば「やかまし」）はそれだけで既にマイナスイメージであるのだが、さらにその程度の甚だしいのを表現したいがために、否定的なイメージを醸す「ない」をお尻に付着させたのだ。この現象は自然な人間の所業として理解できる。こうした素性を持つ語は、現代共通語では、「切ない」の他に「せわしない」くらいしか見当たらないが、例えば「気の置けない人」を否定的に捉えてしまうというのは、現象は逆でも原理は一緒だと言える。また、「ない」で

はないが、「負けず嫌い」という時の「ず」は、論理的には不要なはずだが、全体としてのマイナスイメージを醸すためには必要なものである、というのも同じ現象と言えるかもしれない。

こうして見ていくと、「切ない」は古くからある「切せちなり」という形容動詞のマイナスイメージを強めた表現だということがはつきりわかってくる。「切なり」という語の根本的な意味は、漢字「切」が持つ「切迫している」「痛切である」という語義そのままであると考えてよい。そうすると「切ない」は、ひどくさし迫り、痛切である、という感情の表現であると言えるよう。確かに、現代の私たちが「切ない」と思うそのタイミン
グは、それが自分に関することであつても、他者に関することであつても、かなり切迫して痛切な状態に接した時に限られるような気がする。

では、「大切」はどのようなのだろう。吉井氏の言う通り「切」が「切ない」の語幹だとするなら、「大好き」が「とても好き」だというのと同じように、「大切」は「とても切ない」に違はなく、結果「大切」の意味は「とてもとても切迫していて痛切

だ」ということになる。さらに「とても大切」なんて言われたら、もう面倒くさい。面倒くさいので、もとに戻ると、吉井氏の「大切⇨大きく切ない」説は、国語史的に見てもほぼ正解に近いのではないだろうか。私にはそう思えてくる。ちなみに、さらに調べてみると、「大切ない」という言葉までも発見された。江戸時代に使われたようだ。これはもう間違いないという気がする。

さて、その大きく切ない「大切」であるが、この言葉の歴史を語る際、避けて通れないのが、日本キリスト教史における「御大切」という用法であろう。つまり、現在「神の愛」と訳されている原語を、隠れキリシタンたちが「でうすの御大切」と日本語訳した、というあれである。これについては、古今にわたって語り尽くされた感があるが、実は、私には少し納得のいかないところがあるのである。冷静に考えてみよう。まず、巷間の論調を少しデフォルメして紹介する。曰く…Loveの訳語として「愛」という語がふさわしくないので、隠れキリシタンたちは「御大切」という語を選んだ、それはいかにも名訳であ

る、神が私たちを大切に思ってくれるのがすなわち今言う神の愛の真意なのだから…と。

さあ、まず私が思うのは、英語と葡語を混同している人があまりに多いということである。キリシタン世紀に我が国にキリスト教をもらたしたのは、言うまでもなくポルトガル人宣教師たちである。彼らは英語は使わなかっただろう。

さらに根本的な問題点であるが、「御大切」という日本語を使うと決めたのは隠れキリシタンではない。日本人ではないのである。ポルトガル人宣教師なのである。もちろん日本人の意見も聞いただろうが、とにかく「Deusのamor」の訳語を「デウスの御大切」に決定したのは、まちがいなくポルトガル人である。具体的人物名もほぼわかっている。

次にloveの、*caritas*や*amor*の訳語として「愛」がふさわしくなかったから、という部分である。これもずいぶんと勝手なストーリーである。なぜなら、*amor*を「愛」という漢語で訳そうとした、というか、訳そうかなあと考えた、そんな事実は全くないからである。明治時代、英文学や哲学が輸入された時、

文学者か哲学者によつて、loveの訳語として初めて「愛」が採用されたわけで、キリシタン世紀に、宗教家が amor を「愛」と訳そうなどと発想するはずはないのである。よく言われるように、「愛」という漢語は、当時、特に仏教界では「煩惱・貪欲・愛欲・性欲」の意味で用いられていた。自分が宣教師になつてみれば、誰もそんな語を最も大切な語の訳語にはしないだろう。候補にすら挙げない。「どうすのエロス」では布教などできたものではない。

まあ、ここまででは笑い話としてもかまわないようなことであるが、さあ、いよいよ次に、最も肝心なことを考察してみようではないか。つまり「御大切」が「名訳」であるかどうかである。いきなり結論を言わせてもらおう。「御大切」は「名訳」である。それもかなりの「名訳」である。ただしそう断ずる理由は、「神が私たちを大切に思ってくれるのがすなわち今言う神の愛の真意なのだから…」ではない。

私たちはそれこそ大切なことを忘れがちである。つまりは「御大切」という日本語が、当時どういう意味で使用されてい

たかという大切な考察を忘れていくということである。今の用法をそのまま適用し、「神が私たちを大切に（大事に）思ってくれる」では神様に申し訳ない。神様に関する大切なことは慎重に運ぶべきである。

とは言っても、現実の考証はなかなか厳しい。当時の用例に当たっても、その「大切」が、ただの「大事」なのか、「大きく切ない」のかわからないのだ。文脈からはどちらとも取れるのである。では、いわゆるキリシタン本ではどうだろう。当時の宣教師たちが日本語を学ぶために編纂した「日葡辞書」を見てみよう。

Taixetu = amor

うゝん、いきなり来ましたな。「大切」は amor、amor は「大切」。そのまま。スタートに逆戻りしてしまった。しかし、「大切」 || 「大事・重要」とは書いてないというのは確かだ。私の調べた限りでは、当時の amor は少なくとも「大事・重要」というだけの単純な意味ではない。この時点で、現代人の「神が私たちを大切に（大事に）思ってくれる」などという

無責任な発言が許されざるものであることが明らかになる。

が、考えてみれば、*amor*も所詮翻訳語にすぎない。おそらくギリシヤ語からの翻訳であろう。いや、本当のことを言うと、イエスやその弟子は（一部を除いて）ヘブライ語だかアラム語だかを喋っていたわけで、ギリシヤ語で書かれた現存最古と言われる聖書も、所詮翻訳ということになってしまっただが……。しかし、ヘブライ語やアラム語で書かれた聖書というものはないらしいのでしかたない。ここは、ギリシヤ語に目を向けてみよう。

新約聖書には、現代日本語の「愛」に相当する可能性のあるギリシヤ語が複数ある。その中で一番有名なのは「アガペー」であり、これについては、語るまでもないというか、私のような異教徒が簡単に語るべきことではないと思うので、他の人にまかせるとしよう。まあ、倫理の教科書的に言えば、無条件の愛というやつだ。「神の愛」は基本的にこのアガペーであると言われる。他に、英語の *like* に近い「フィリア」もあるが、ここでは問題にしない。それより、私が注目したいのは、「スプ

ランクニゾマイ」というギリシャ語である。これは一般に「憐れむ」と訳される動詞であるが、語源的には内臓（スプランクノン）が動くという意味らしい。この「スプランクニゾマイ」という単語は、聖書の中でイエスのみを主語として現れる。ここでは、その具体的箇所を紹介はしないが、それぞれのシーンからは、苦しむ対象を目の当たりにしたイエスの、はらわたのわななくような、肉体も心も切り刻まれるような、激しい痛みを伴った共感が読み取れる。

さて、ここでいきなり核心に迫る。私はこの「スプランクニゾマイ」と「大切」を結びつきたいのである。もつとはつきり言うなら、「スプランクニゾマイ」の日本語訳が「大切」であると考えたいのである。

ポルトガル宣教師が活発な布教活動を行っていた頃、日本の民衆の多くは、仏教に、来世での救いよりも現世での御利益を求めていた。そうした民衆に、キリスト教の「アガペー」を理解させるのは、非常に難しいことだったろう。例えば当時流行していた一向宗において、阿弥陀の慈悲はある意味「アガペー」

かも知れないが、それを得るために人間がすべきことは「南無阿弥陀仏」と唱えることだけであり、キリスト教における相互愛のような関係性は全くない（その点に関して、当時の宣教師が「一向宗はルーテル派に似ている」と書き残しているのは興味深い）。だから「どうすの愛」はもちろん、「どうすの慈悲」でもだめだったのだ。では、どうすれば相互愛としての「アガペー」を日本民衆に理解させられるのか。

ここで登場するのが、「大切」という日本語である。

先ほど述べたように、「スプランクニゾマイ」は、苦しむ対象を目の当たりにしたイエスの、痛みを伴う内的な共感である。

一方、「大切」とは、非常に切迫して痛切な状態であると解釈した。ここまで述べればもうお解りと思うが、この二語には、かなり強い相似関係があるのである。まさに身を切るような思い、断腸の思いが両者を結びつけているのだ。

宣教師たちは、キリスト教の教義における amor というポルトガル語を、「アガペー」の直訳語としてだけでなく、「スプランクニゾマイ」という意味をも含ませて使っていたに違いな

い。だから、Deusのamorを「どうすの御大切」と日本語訳した。そして、人間から神へのamorについても「どうすを万事にこえて御大切に敬ひ奉るべし」と表現した。ここにあらわれる「大切」こそが、日本人の心性にもかない、また宣教師たちの考える「Deusのamor」の真意からも大きく外れない、まさに名訳であったのだ。

よくぞ「大切」という語を選んでくれた。ポルトガル人宣教師たちの真摯な信仰心と、その教えを正しく受け入れようとした日本人キリシタンの純粋な心に胸を打たれる。のちに彼らが弾圧を受け、殉教者を多数出しながら、異教の蓑を借りてまで細々と生き残り、まさに断腸の思いでその誠を貫いたという事実には接すると、私のような者でも大きく切ない気持ちになる。言葉の歴史に思いをはせるといふことは、言葉自身の命と、それを使った人々の命を大切にすることにつながるのであった。

さて、今一度現代に帰ってこよう。冒頭の吉井氏の言葉を新しい目で見直してみる。

「今この時間は僕たちのとても大切な瞬間だよ　でもどうし

て大切という字は大きく切ないのかな」

「大きく切ない」と感じる時、われわれは対象と一体化している。恋人と一緒にいることによつて、その恋人とではなく、その恋人と一緒にいる時間と一体化する。この時間は、ただ自分たちの大事な所有物というのではなく、無常の切なさを、まるで痛みのように感じさせる瞬間瞬間になる。時間の流れとして感じていたものが、静止画のような一瞬一瞬の積み重ねに変わっていく。それらは確実に記憶、つまり過去になつてゆくのである。それは切ないことだ。過去は人間には変えられないからである。過去の大切なアルバムを繰ることは、さらに大きく切ないことだ。人間は神とは違い、万能でも何でもない。だから、我々の「大きな切なさ」には、共感はできても何もしてあげられない、そんな虚しさと哀しきも伴うことになる。

胸がキュンとする、などという俗っぽい言い方があるが、実はこの「胸キュン」こそが、「スプランクニゾマイ」の正体であり、「大切」の表現なのであった。私など、異性に対して胸キュンすることがほとんどなくなつてしまつて久しく、それは

正直淋しく思うのだが、しかし最近、その代わりと言つてはいけないかもしれないけれど、私の胸にキュンを催させるものが新たに現れた。娘たちの寝顔である。今ものすごくいいおしいのとともに、吉井氏の詩ではないが、いつまでこういう時間が続くのかという切なさを感じるのだ。やはり子どもというものは、自分と一体化して大切なものなのだろう。そういう大切なものを持っている自分は幸せであると思う。しかし、一方で、自分が誰かの大切なものになっているのか、少し不安にもなつてしまった…。ホントのところ、どうなんでしょう。まあ、せいぜい神様仏様には見捨てられないように、**普通**の生活をしていこうか。

随想駅伝の目次に戻る